

人と人  
つながりの物語

illustration: Maiko Dake

コープデリグループの組合員数は約550万人。組合員の皆さんの数だけ、物語がある。その物語を毎月一つお届けしていきます。描いているのは皆さんのくらしとコープデリの接点。あなたの物語はどんな物語ですか。

76歳になる喜美代さんは、物心ついたころからほとんど視力が無い。「2歳のときに、病気の合併症で白内障になって。手術もうまくいかず、左目で光や色を感じるくらい」という喜美代さんにとって、スーパーまで出かけて買い物をする負担は大きい。安全・安心へのこだわりにもひかれ、40年ほど前から暮らす埼玉県越谷市で、コープのグループ配達を利用して、「当時は商品の仕分けや代金の集金持ち回りの班長もあつたけれど、みんなが『大丈夫。班長はやらなくていいから』と仲間に入れてくれました」と振り返る。以来、食品や日用品の多くをコープで賄ってきた。野菜や肉・魚だけでなく、長期保管が可能な「CO・OPモーニングクロワッサン」や、同居する息子の好きな納豆などをよく頼む。

現在グループは喜美代さんを含めて4人。「うちの前を配達場所にしてくれて、誰かしら私の分を渡してくれます。重ときは家の中まで運んでくれます」と感謝する。

トテーブを届ける「リーディングサービス」が導入されると、すぐに利用し始めた。現在は「ハピ・デリー」などの内容が専用のCD（デイズー図書版）で届けられ、コープデリグループで約500人が利用している。5000点ほどの商品情報が専任の職員や自動音声で読み上げられるため、1回の注文分で約25時間にもなる。専用の機器で速度を上げて再生し、ページを飛ばすなどしても時間がかかる。でも、これがあれば自分で商品を選ぶことができる。喜美代さんは何日かに分けて聞き、買いたい商品を点字でメモして、まとめて電話注文している。近所の友だちが注文書に記入してくれることも多い。「調理方法の確認などもしてくれま

す。こうした人とのつながりがなかったら、きっと大変ですね」2025年11月には、コープみらいでのリーディングサービス利用者を対象にした懇談会に参加。宅配センター長や、同じ境遇の組合員と交流した。「駅から会場までセンター長さんが誘導してくれたり、点字の資料を用意してくれたりと配慮がうれしかった。利用者同士で情報交換もできて、楽しかったわ」と喜美代さん。長年利用するリーディングサービスへの愛着

も新たにした。「毎回膨大な量の商品情報を吹き込んでくださる方、注文内容を丁寧に復唱してくださるコールセンターの方には感謝しかありません」

届いた商品は、大体の物は触れば分かるが、冷凍食品の区別は難しい。「魚の切り身だと思つて友だちに確認したら、チヨコバナナだったこともあり、チヨコバナナだと笑います」と笑う喜美代さん。前向きな姿勢や明るさは、6歳まで過ごした奄美大島で育まれたものかもしれない。昔は障がい児を家から出さないことも多かったが、喜美代さんは島のおおらかな人々に囲まれてのびのび育つた。

今は、趣味のコーラスやサウンドテニス（視覚障がい者が行う卓球）を楽しむ日々を送る。「おいしい食べ物があるとうれしい。元気なのはコープのおかげ」と話す喜美代さんは、これからもできることではできるだけ自分でやりたいと思つている。

過去の物語も  
こちらから読めます



あなたのエピソードを  
お寄せください。

コープ職員との心に残る出来事を随時募集しています。氏名・電話番号・組合員コードを記入し、郵便(〒336-8526埼玉県さいたま市南区根岸1-4-13 コープデリ連合会 コミュニケーション推進部宛)か、左記のWeb応募フォームよりお送りください。